ゴットフリートの『トリスタン』

——〈花嫁出迎えの旅〉について——

Gottfrieds »Tristan«

——Über die Brautfahrt——

斎　藤　芙美子

ゴットフリートがトリスタンと王女イゾルデとの愛の始まりを、媚薬を飲む以前と考えていたのか、それとも以後と考えていたのかについては、研究者の間で解釈が二分されている。筆者は前号において、タントリス・エピソード（7231行-8225行）で述べられているセイレーン（Syrēnen）比喩の独自性にこそ、愛の始まりに関するゴットフリートの暗示が秘められているのではないかという拙論を展開した。[1)]

この稿では、ゴットフリートが、トリスタン伝説に従いながらも、主人公たちの愛の軌跡をいかに描出していくのかを、「花嫁出迎えの旅」（8226行-8896行）と呼ばれている章の中で探ってみたい。

1

アイルランド王妃イゾルデの手によって、王妃の兄モーロルトから受けた致命傷を癒やしてもらったトリスタンは、王妃イゾルデや王女イゾルデに仇とは悟られることなく、無事にコーンウォールへ逃げ帰ってきた。「このような奇跡にも似たことを未だかって聞いたことがない」（8246-8247）[2)] と、マルケ王をはじめ、コーンウォールの人々は驚いた。

人々が王女イゾルデについて「熱心に」（8251 genôte）尋ねるのに答えて、トリスタンは次のように説明している。

「イゾルデこそ乙女の中の乙女です。世間で美しいといわれるものも、彼女と比べれば無に等しいのです。この光り輝くイゾルデ、態度といい、容姿といい、これほど可愛いい、これほど秀でた子供は未だかって生まれたことはなかったし、今後も生まれることはあり

ません。明るく、光り輝くイゾルデは、アラビアの黄金のように輝いております。曙の女神アウローラの娘で、テュンダーリスとも愛称されていた、あの有名なヘレナを賛美して書かれた本を、私は読んだことがありましたが、彼女一人に、あらゆる女性の美しさが、たった一つの花に集められるように、集められたという賛美を読んで考えていたことを私は考え直しました。イゾルデが私の考えを改めさせたのです。私はもはや太陽がミケーネから昇るとは思いません。ギリシャに完璧な美が輝いたのではなかったのです。それはここに輝いているのです。考えのある者すべては、アイルランドにのみ目を向けるべきです。そこに彼らは目の喜びを見出し、まるで新しい太陽が曙の後から昇るように、王女イゾルデが王妃イゾルデの後から、あのダブリンから、全ての人の心の中へ輝き昇ってくるのを見出すのです。あの光り輝く素晴しい人が全ての国を照らすのです。女性を称えて言われる全てのこと、賛美して語られる全てのことは、この人に比べれば、取るに足りません。イゾルデを目にする人は、丁度灼熱が金を精錬するように、心も頭も浄化されるのです。全身を快くしてくれるのです。大低の人は考えるかもしれませんが、彼女によって、他の女性の影がうすれるとか、つまらなくみえるとかいうことはありません。彼女の美しさは、女性という女性を全て美化し、飾りたて、栄冠に輝かせるものなのです。それ故、女性の誰一人も恥じ入る必要はないのです」(8253-8300)。[3)]

上記の王女イゾルデ賛美をめぐって、多くの研究者が、トリスタンとイゾルデの愛に関する、さまざまな見解を発表してきた。

まず最初に、この王女イゾルデ賛美に注目したのは、ランケ (Friedrich Ranke)であった。「ゴットフリートは、トリスタンがアイルランドから帰還した時、イゾルデに対する称賛を口にさせているが、トリスタンは感きわまりながら、古代の最高の美女であるヘレナとイゾルデを比較しつつ、主人公自身に対する美少女の強い影響をはっきりと表に出している」[4)] と指摘した。

またランケの弟子であったニッケル (Emil Nickel) も、この賛美の中に、「秘かに内在するエロティックな興奮状態と意味あいを含んだ精神」[5)] を感じとっている。

更に、シュヴィーテリング (Julius Schwietering) も、「アイルランドに昇る美の太陽への賛美の言葉は――『私はもはや太陽がミケーネから昇るとは思いません。ギリシャに完璧な美が輝いたのではなかったのです。それはここに輝いているのです』――この言葉がマルケ王やその重臣たちに求婚への決意をかきたてるのだが、トリスタンの姿と武器を好気心をもってイゾルデがじろじろみつめる場面と同様に、前者では特に女性の現象形態の中に、後者では男性の現象形態の中にあって、双方とも合理的には把え難いものの存在として、表現されており、作品のコンテクストの中で言いつくそうというよりも、示唆しようとしているのである」[6)] と解釈した。

ハイメルレ (Magda Heimerle) はまた次のように論じている。「トリスタンはイゾル

デのことで胸が一杯になっている。そのことを、彼が帰国して、マルケ王の宮廷の人々の前でほめそやす彼女の美しさに対する賛辞が明らかにしている。トリストラム・ザーガから推し測って、フランス詩人はトリスタンの口から時折イゾルデを称える言及のあったことを、一般的に暗示するにとどめていただろうということが考えられる。このドイツ詩人が初めて、イゾルデのことでトリスタンの胸が一杯になっていることを描写している」。[7)]

またヴェーバー（Gottfried Weber）の解釈によると、「アイルランドの、全てを隈なく照らす太陽への熱狂的な賛辞、精錬された金の描写、そして新しい高められた生への予感は、胸に秘められた感動的存在のあることを雄弁に物語っている」[8)] ということになる。

以上の研究者の見解からは、王女イゾルデ賛美の中に、トリスタンの愛の表白を見出そうとする解釈が強く打ち出されている。しかし一方では、フルストナー（Hans Furstner）のように、全く異なる、次のような解釈を提起する研究者もいる。

「この種の称賛は全く宮廷風であり、モールンゲンやライマールのような賛美と精神は同じであって、文言しか違わない。この箇所は、いずれにせよ、ミンネザングと、つまりミンネザングの中にみられる愛の噂話と関連している。ミンネザングでは、婦人はその独自の人格に於てではなく、有用な性質の故に愛される。ミンネゼンガーは自然に生じる愛の出会いを知らない、ミンネゼンガーは彼の囲り、つまり彼の貴婦人の価値を見知っていて、その人を称えることができる人々があってこそ、存在しうるのである。……

イゾルデの称賛は、トリスタンの心が既にイゾルデのための愛に燃えているということを、われわれに明白にする目的を持つものではなくて、唯ひたすらマルケ王の心を、『あの光り輝く素晴しい人』(8285) へ向ける目的を持つものなのである」。[9)]

2

このように、全く相反する解釈がなされるイゾルデ賛美ではあるが、どの研究者も、この賛美の直前で吟じられていたタントリス・エピソードとの関連に言及することはない。

しかし、タントリス・エピソードこそトリスタンと王女イゾルデとの初めての出会いの場である。しかも前号で述べたように、トリスタンの教育によって、セイレーン（Syrēnen）に喩えられるような王女イゾルデが育てられたというゴットフリートの指摘 (8133) が、このイゾルデ賛美に先立つこと、わずか百行前に聴衆の耳に刻まれていたことを、看過すべきではなかろう。

セイレーンの比喩が耳に強く残っている聴衆に、このイゾルデ賛美がどう響くのかを、今一度分析してみよう。

クルツィウス（Ernst Robert Curtius）の名付けた「凌駕のトポス」[10)] を用いて、このイゾルデ賛美は語られていくが、その中の次の比喩に筆者は注目したい。

「明るく、光り輝くイゾルデは、アラビアの黄金のように輝いております」(8261-62 diu lûtere, diu liehte Îsolt, / diu ist lûter, als arâbesch golt.)[11] とゴットフリートは語っている。ここで用いられている lûter, lieht という形容詞は、メルゲル (Bodo Mergell) が指摘しているように、「イゾルデのための、ご贔屓の付加語形容詞となっている」[12] ものだが、その喩に「アラビアの黄金」が用いられていることに注目したい。

この「アラビアの黄金」という喩を、ゴットフリートは『トリスタン』の中で、二度しか用いていない。その一度目は「文学批評」の、ヘリコンの山々への祈念の中に出てくるのであるが、前号で指摘したように、そこでは「セイレーン」も初めて登場してきている。

「私の祈りと願いを、今はじめて心をこめ、手を合わせて送り届けよう、ヘリコンの山々に向って、あの九重にかさなり合う玉座に向って、あそこから泉が湧き、その泉から言葉と表現力という天賦の詩才が流れでてくるのだ。あの山のあるじと、九人の女あるじたち、アポロとカメーネン、即ち耳をあやつる九人のセイレーンたち (4872 Sirênen) は、あの山の宮殿で詩才をつかさどり、この世の人に思いのままにその恵みを分ち与え、その英知の泉の水を、こんなにもたっぷりと多くの人に与え給うのだから、私に対してもその一滴を、名誉にかけても拒むことはなさるまい。そして私がその一滴を手に入れることができれば、物語ることによって得られる私の席を、確保することができよう。その一滴とは云え、微々たる力ではなくて、未だ混迷状態にある私の舌と理性を、正常にひきもどし、立ち直らせるはずである。その一滴が私の言葉をカメーネンの英知の光り輝くるつぼの中をくぐらせて、その中でまことに不可思議な美しさに溶かし、アラビアの黄金のように (4895 als golt von Arâbe) 完璧なものにするはずである」(4862-4895)。[13]

上記引用文が語られている、いわゆる「文学批評」の箇所は、ゴットフリートの独自の世界であって、トリスタン伝説とは何の関係もない。その「文学批評」中の、ヘリコンの山々への祈念と、イゾルデ賛美とは、文脈上は無関係のように思われる。ところが、その叙述法にはおどろくほどの近似性がある。

その近似性を、メルゲルは次のように指摘している。「古典古代の文学は常に女性美を褒め称えながら賛美するのであるが、その古典文学がゴットフリートによって、いわば類型学的思考方法を文学的に展開する中で、彼の作品の中へ調和をもって取り込まれ、そしてこの中世盛期の只中で止揚され、超克されている。そのことをトリスタンが、マルケ王の宮廷へ帰国後に賛美形式の響をもつ次の詩句の中で、表現してみせる。即ち、『曙の女神アウローラの娘で……(中略:上記引用文参照)……あの光り輝く素晴しい人が全ての国を照らすのです』。

このギリシャ古典古代的なるものの取り込みと、中世キリスト教的なるものを通したその昇華によって、モティーフ融合の典型が創り出されており、それは、このドイツのトリスタン物語のクライマックスで何度か表れてくるのだが、その最も顕著なのは、文芸の神

に対する詩人の祈念においてであろう。そこでは、キリスト教的祈りの形式が古典古代の神話を取り込んで、文芸を精神的心象の中に映し出し、実現しようとしている」。[14)]

メルゲルは、ヘリコンの山々への祈念とイゾルデ賛美に共通している、古典古代的なるものと中世キリスト教的なるものの融合昇華の叙述法を指摘したのであるが、筆者はこの二箇所の近似性の中で、次の点に注目したい。

ヘリコンの山々への祈念には、ヘリコン（4865)、アポロ（4871)、カメーネン（4871)、セイレーン（4872）というギリシャ神話にまつわる固有名詞に混って、唯一つ異質な「アラビアの黄金」(4895) が用いられていること、またイゾルデ賛美の中でも、アウローラ (8261)、テュンダーリス（8267)、ミケーネ（8274)、ギリシャ（8276）という古典古代との関連語に混って、唯一つ「アラビアの黄金」(8262) という異質な比喩が入ってくることに注目したい。

このアラビアの黄金について、オッケン（Lambertus Okken）は、次のような解説をしている。「中世時代のマグリブ（筆者注：リビア-モロッコの西方地域）の商業地には、非常に沢山の金が集ってきた。西スーダンからキャラバンで金がこの地方へ絶えず豊富に輸入された。それ故マグリブでは非常に純度の高い金でつくられたコインが取引の通常であった。西ヨーロッパの商人たちは、トリポリやチュニス、その他のマグリブで、このコインで支払われることをよろこんだ。この地域から、恒常的かつ広範囲な金が、十二、十三世紀には、ヴェニスやジェノヴァ、ピサを経て西ヨーロッパへ流れ込んだ。アラビアの黄金とは、従って、トリスタンの詩人にとっても、その聴衆にとっても、極上の黄金であった」。[15)]

この解説から明らかなように、「アラビアの黄金」という表現は、ゴットフリートの生きていた中世盛期の、まさに流行語であったと考えられる。この中世の流行語が、古典古代のギリシャ神話的心象風景の中に、異質な比喩として挿入されたのが、上記の二箇所である。ゴットフリートは、こういう叙述を無意識に行ったのであろうか。筆者には、ゴットフリートの意識的な叙述であったと思われて仕方がない。

もっともこの二箇所に出てくる「ゴットフリートが好んで用いる黄金の精錬のイメージ」[16)]は、「聖書的イメージと云って当然であろう」[17)]とシュテークレ（Ulrich Stökle）は論じている。更にシュテークレは、王妃イゾルデと王女イゾルデの母娘が、ゴットフリートによって、曙（8281 morgenrôte）と太陽（8280 sunne）に喩えられていることについても、「こういう比較は、叙事詩の伝統から出ているのではなくて、やはり教会の伝統に基づいている、というのも、教会関係の文筆家や、説教、賛歌、祈祷等の中にも、非常に早い時期から、マリアとその子イエスが曙と太陽に比較されているのだ」[18)]という指摘もしている。

シュテークレのこのような指摘も、メルゲルの主張するところの、「中世キリスト教的

なるものを通した古典古代的なるものの昇華」というゴットフリートの特性に帰一させることができよう。

しかしながら、先にも記したように、文脈上は何の関係もないのに、メルゲルの指摘するゴットフリート的叙述においては、きわめて近似しているヘリコンの山々への祈念と、イゾルデ賛美の二箇所で、何故ゴットフリートは「アラビアの黄金」という、当時の聴衆にとって流行語とも云うべき比喩を用いているのであろうか。

この二箇所には、ゴットフリートが聴衆に解いてほしいと願った謎が秘められていたのではないだろうか。

その謎を解く鍵は、ヘリコンの山々への祈念の中に出てくる「セイレーン」(4872 Sirênen) にあったのではないかと筆者は考えている。

前号で述べたように、「セイレーン」という固有名詞は、ヘリコンの山々への祈念の中で一回 (4872) と、「タントリス・エピソード」の中で二回 (8087、8111) の、極めて限定的に用いられている比喩である。

そのセイレーンの比喩には、イゾルデの美しさと音楽、音楽とミンネの表裏一体の関係を表現しようとしたゴットフリートの意図がこめられていたのではないか、という拙論を前号では述べてきた。その際、セイレーンに喩えるべき王女イゾルデを教育した人こそトリスタンであったというゴットフリートの指摘 (8132-8141) は、王女イゾルデとトリスタンの間に音楽を媒体としたミンネが芽生えていたことを、聴衆に告げ知らせるものであると筆者は解釈した。

その直後、百行余り後で、トリスタンのイゾルデ賛美を聴衆は耳にするのである。その賛美は、メルゲルの指摘したゴットフリート的詩句で綴られていた。その古典古代的なるものと、中世キリスト教的なるものの融合昇華した美しい詩句の中で、王女イゾルデを称える「アラビアの黄金」(8262) という、当時の流行語とも云うべき印象的な比喩が聴衆の耳を把える。この「アラビアの黄金」という、二度目の印象的な響きは、聴衆に対して、ヘリコンの山々への祈念を、ヘリコン(4865)、アポロとカメーネン(4871)、セイレーン(4872)、そして「アラビアの黄金」(4895) を想起させるに十分な端緒となったのではなかろうか。

この想起によって、聴衆は、イゾルデ賛美が、直前の「タントリス・エピソード」でセイレーン (8087、8111) に喩えられていた、音楽とミンネの一体化した美しい王女イゾルデに対するトリスタンの愛の告白であることを間違いなく聞きとったであろうと思われる。

3

ゴットフリートが、王女イゾルデ賛美によって、トリスタンの愛の表白を意図していたと考えれば、このイゾルデ賛美につづく次の詩句の解釈も、自ら解決されよう。

「快活になったトリスタンは、再び自分の生活を取り戻した。彼に第二の生が与えられた。彼は新しく生れ変った人間であった。今初めて彼の新しい生活が始った。その時彼は嬉々として楽しそうであった」(8310-8314)。[19)]

この詩句の解釈に関連して、メルゲルは、次のように述べている。「ゴットフリートは、宗教的範疇から個々のイメージやメタファーを、例えば〈新生〉、〈新生活〉、〈パンとぶどう酒〉、〈精錬〉、〈永遠の死〉などの概念を使っているが、それらには、彼の文学的世界像の中で、全く独自の意味が付与されていて、その意味はそれぞれ、トリスタン創作の全体の意図からのみ、求め得られるのである」。[20)]

では、先の引用文に叙述されたトリスタンの〈新生〉、〈新生活〉を、ゴットフリートの全体的意図から、どのように意味づけるべきであろうか。

ヴェーバーは、すでに引用したところ（引用８）だが、「新しい高められた生への予感は、胸に秘められた感動的存在のあることを雄弁に物語っている」と解釈した。

これに対して、フルストナーは次のように反論した。「〈予感〉をわれわれも行間に見つけることはできるが、しかし、胸に秘めた愛の感情が仮にもあるからではなくて、（そのような愛情があるとすれば、今やイゾルデから遠く隔てられているトリスタンにあっては、むしろ悲しみの感情を呼び起こしたのではないか、というのもこの瞬間には再会の可能性が未だ話題にのぼっていなかったのだから)、そうではなくて、トリスタンが、いわば死の淵から帰還して、もう一度実社会へ出ていけるからである」。[21)]

フルストナーは、もしトリスタンが生れて初めて王女イゾルデに愛を抱いたのなら、遠く隔てられた今、嘆き悲しんでいるはずだと主張するのだが、ゴットフリートが描いてきたトリスタン像から考えて、フルストナーの推論が果して妥当なのであろうか。

そもそも、トリスタンが致命傷を負うことになる「モーロルト・エピソード」で、ゴットフリートは、貢祖か、一騎打ちか、国と国との戦いか（6362-6388）という、トリスタン伝説とは異なる新しい選択肢を設定し、一騎打ちを国と国との戦いの代理戦争であると意義づけていたと筆者は解釈している。[22)]「国と国との戦い」(5969 lantvehte, 6372 lanther, 6381 lantstrît）の代りに、トリスタンはモーロルトとの一騎打ちを行い、致命傷を負いながらも、コーンウォールの国を救った勇猛果敢な勇士であった。

その致命傷が、モーロルトの妹である王妃イゾルデの手による以外には治癒しないと、モーロルトより聞かされていたトリスタンは、座して死を待つよりもと、敢てアイルランドへ赴いたのである。

そして傷癒えて帰国した今、初恋の王女イゾルデから、「遠く隔てられている」からといって、「悲しみの感情」に打ち沈む姿が、勇士トリスタンから想像されるだろうか。

むしろ、どのような困難にも昂然と立ち向ってきた勇士トリスタンには、初恋に対しても、困難が伴えば伴うほど、それをのりこえようとする情熱をもやす姿を想像する方が、

「悲しみの感情」に打ち沈む姿を想像するよりも、はるかに自然なのではなかろうか。

初恋という〈新生〉の力を得て、「今初めて彼の新しい生活が始まった。その時彼は嬉々として楽しそうであった」と筆者は解釈したい。

4

マルケ王がトリスタン以外に世継ぎは不要という態度を示すにつれ、トリスタンに対する妬みや憎しみが重臣たちの間にひろがっていった。その時トリスタンは次のように申出る。「王様、ではおさらばいたします。私はこの宮廷から去ろうと思います。私は彼らから身を守ることはできません。このような憎しみの中にいては、もう生きていくことはできません。このように憎まれて、全ての王国を手中におさめるよりも、一生領国のない方がましです」(8424-8432)。[23)]

この申出の言葉の中にも、初恋という〈新生〉の力を得たトリスタンには、領国のない身分になることなど、何ら問題ではないと考える大胆さがあることを描出しようとするゴットフリートの意図がうかがえる。

トリスタンが国を去ってしまうことを恐れたマルケ王は、「甥よ、私はお前に変らぬ誠をどれほど待ちつづけていようとも、お前は私にそれを許さないのだ。……さあ、お前は私に何をしてほしいのか云ってごらん」(8435-8442)[24)] とすすめた。それに応えて、「あなたの宮廷顧問官たちをお呼び寄せになって下さい。あの人たちはあなたにいろいろ助言してきた人々ですから。そして一人一人の気持をお聞き下さい」(8443-8445)[25)] とトリスタンは訴え出た。

その結果、重臣たちは、「ただトリスタンを殺すために」(8453)[26)]、マルケ王にアイルランド王女イゾルデとの結婚をすすめ、その使いの役目をトリスタンに押しつけることを企んだのである。その時、トリスタンは次のように申出ている。

「王様、あの人たちはそんなに間違ったことを申しているのではありません。全く当然のことですが、あなたのお気持がすすむことに対して、私は他の誰よりも喜び勇んで引き受ける用意がございます。また私がそれをするのは当然であり、王様、私はそれに打ってつけの人間です。本当に誰も私よりうまくそれを成し遂げられません。どうかあの人たち皆に、私と一緒に行って、往きも帰りも、あなたの用命と名誉を守るように命じて下さい」(8545-8557)。[27)] 更につづけて、「王様、本当にこれはどうしてもなされねばなりません。あの人たちが死のうと、生きようと、私もあの人たちとご一緒しなければなりません。この国が世継ぎのないままなら、それが私のせいかどうか、あの人たち自身に見てもらいたいと思います。あの人たちに用意するよう命じて下さい。私が舟を操って、私自身の手で、あの幸福にみちたアイルランドへ、ダブリンへ、多くの人の心に喜びをもたらす太陽の輝

きを持つ人の所へ導びいてまいります。あの美しい人がわれわれに与えられるかどうか、誰にわかるでしょう。王様、あの美しいイゾルデがあなたに与えられるのなら、われわれ皆が死んだとしましても、それは大したことではございません」(8561-8577)。[28)]

このトリスタンの申出に関しては、「トリスタンが事の成り行きによって、自分で求婚の使いを引き受けるという、おどろくべき、全く根拠薄弱の申出にまとわりつかせている、この奇妙な情熱的な言葉」[29)] からも、ニッケルは、「秘かに内在するエロティックな興奮状態と意味あいを含んだ精神」を感じとっている。

またヴェーバーは、この申出について、「この魔力で引き寄せられているものは、若者らしい死をも恐れぬ勇気の芽生えにまで高揚している」[30)] と指摘し、更に、「重臣たちによる殺害の脅しのためにトリスタンが動揺したこと、及び無意識に恋している者が、あの唯一人のイゾルデに面会できるという期待をもったこと、この二つのチャンネルから心理的には出てくる、求婚役の引き受けによって、ゴットフリートの主人公は、彼の恩人であり王である人に対して、間違ったやり方の忠誠と感謝に追いつめられる」[31)] という解釈を示した。

これらの見解に対しても、フルストナーは次のような反論を試みている。まず、ニッケルに対しては、「トリスタンの言葉は、この状況の下で、実際それほど〈奇妙で、情熱的〉であろうか。トリスタン――『新しく生れ変った人間』――が、重臣たちの殺害の脅しにいらだって、同道するという申出を、このような情熱的な言葉に云い表すことが、それほど奇妙なのだろうか」[32)] と反論した。

次にヴェーバーに対しては、以下のように反論している。「中世の騎士が、重臣たちの狡猾な提案に対して、アイルランドへ行く用意があると答える以外に、何ができたであろうか。特に、マルケ王は重臣たちの敵意のこもった狙を暴いていたのだから。臆病者、つまり、トリスタンのような完璧な騎士でない者だったら、使いに出ることを拒むこともあったかもしれないが。トリスタンの反撃は見事である。陰険な重臣たちを彼と一緒に旅行させようというのだから。今では彼らはその旅行に反対することはできないのである。無意識の愛をこのトリスタンの態度から考え出す必要は全くない。……無意識の愛というような他のチャンネルを探したりは誰しもしないだろう。〈若者らしい死をも恐れぬ勇気〉が確かにここにはある。しかし愛以外の他の原因からでも、若い騎士は死をも恐れぬ勇気をもつことがある。しかも、トリスタンの言葉の最後の詩句、『王様、あの美しいイゾルデがあなたに与えられるのなら、われわれ皆が死んだとしましても、それは大したことではございません』、こういう風には、恋している者は、たとえその恋がまだ意識されていない時でも、云わないものだ」。[33)]

以上のように、トリスタンのアイルランド再訪の受託に関しても、研究者によって、さまざまな見解が示されているのであるが、見落してならないことは、ゴットフリートがト

リスタンに、一度はコーンウォールを去る決意をさせたことであろう。

ゴットフリートのプロットでは、トリスタンがマルケ王のもとを去らなかったのは、すでに引用したように、マルケ王の「誠」(8436 triuwe) に応えて、トリスタン自ら、王に重臣たちからの意見聴取をすすめた結果が、アイルランドへの使者の旅となったのであって、トリスタンには、この再訪を受託する以外に、王の、「誠」に応える道は残されていなかったのである。

マルケ王の「誠」を裏切って、王のもとを去るか、「誠」に応えて、アイルランドを再訪するかの二者択一を、ゴットフリートはトリスタンに迫ったとみるべきであろう。

従って、この使者の受託は、ニッケルの主張する「全く根拠薄弱の申出」でもないし、ヴェーバーの云う「間違ったやり方の忠誠と感謝」でもない。この受託は、トリスタンがフルストナーの言葉をかりれば、まさに中世の「完璧な騎士」であったことを証明しているのである。

もっとも、マルケ王は、重臣たちの悪意にみちた企みと危険性を十分認識しており、「いや、ならぬ、コーンウォールの方々、そなたたち自身が行ってくるがいい」(8542-8543)[34] と、トリスタンの行くことには反対していた。それほどこの旅は危険性の高いものであったにも拘らず、トリスタンは受託する。

トリスタンは、死を覚悟して、ヴェーバーの言葉をかりれば、「死をも恐れぬ勇気」をもって、アイルランドへ、「多くの人の心に喜びをもたらす太陽の輝きを持つ人の所へ」(8572-8573) 赴こうとしている。トリスタンにとって、マルケ王の「誠」に応える道が死に至る道であっても、そこに「太陽の輝きをもつ人」がいる限り、「本当に、これはどうしてもなされなければならない」(8561) 旅なのである。

トリスタンは死を覚悟して、王女イゾルデとの再会に懸けたのである。このトリスタンの情熱を、「皆、死ぬにちがいないと思っていた」(8638)[35] 重臣たちの口を通して、ゴットフリートは次のように描き出している。「知恵と技がこの男には多分にある。もし神がわれわれに恵みを与えられ、彼が向う見ずの大胆さを自制しさえしてくれるものなら、われわれも彼と共に生きて帰れよう。その大胆さが彼にはあり過ぎる。彼は余りにも大胆だし、勇敢すぎる。彼は今も自分が何をしようとしてしているのか、気にもかけていない。彼はわれわれのためにも、自分を死から守るためにも、びた一文出しはしないだろう」(8660-8670)。[36]

この「向う見ずの大胆さ」こそ、トリスタンの王女イゾルデとの再会に懸けた、死をも恐れぬ情熱を表すものではなかろうか。「完璧な騎士」トリスタンが、「王様、あの美しいイゾルデがあなたに与えられるのなら、われわれ皆が死んだとしましても、それは大したことではございません」と、主君に対する礼儀作法通りの言辞を弄しているからといって、彼の「向う見ずの大胆さ」に表れる情熱のほとばしりを打ち消すことは不可能であろう。

トリスタンと重臣たちの一行はやがて、アイルランドの港へ近づいた。トリスタンは彼の忠臣クルヴェナルだけを伴って、小舟にのりかえ、ノルマンディーからやってきた「商人」(8802 koufliute) であると身分を偽って、入港を果したのであった。

注

1)『相愛大学研究論集』第9号（通巻第40号)、拙稿参照。

2) 8246-8247

si jahen, sin gevrieschen nie
solhes wunders gemach.

引用は Gottfried Weber: Gottfried von Strassburg Tristan. Text, Nacherzählung, Wort-und Begriffserklärungen. 1967. による。

3) 8253-8300

'Isot' sprach er 'daz ist ein maget,
daz al diu werlt von schœne saget,
8255 deist allez hie wider alse ein wint.
diu liehte Isot daz ist ein kint
von gebærden und von libe,
daz kint noch maget von wibe
als lustic unde als uz erkorn
8260 nie wart noch niemer wirt geborn.
diu lutere, diu liehte Isolt,
diust luter alse arabesch golt.
des ich ie wænende was,
alse ichz an den buochen las,
8265 diu von ir lobe geschriben sint,
Auroren tohter unde ir kint,
Tyntarides diu mære,
daz an ir eine wære
aller wibe schonheit
8270 an einen bluomen geleit:
von dem wane bin ich komen,
Isot hat mir den wan benomen
ine geloube niemer me,
daz sunne von Mycene ge;
8275 ganzlichiu schœne ertagete nie
ze Criechenlant, si taget hie.
alle gedanke und alle man
die kapfen niuwan Irlant an:

da nemen ir ougen wunne,
8280 sehen, wie diu niuwe sunne
nach ir morgenrote
Isot nach Isote,
da her von Develine
in elliu herze schine!
8285 diu liehte wunnecliche
si erliuhtet elliu riche.
dazs alle lobes von wiben sagent,
swaz si mit lobe ze mæren tragent,
deist allez hie wider ein niht.
8290 der Isot under ougen siht,
dem liutertz herze unde muot,
reht als diu gluot dem golde tuot:
ez liebet leben unde lip.
mit ir enist kein ander wip
8295 erleschet noch geswachet,
als maneger mære machet:
ir schœne diu schœnet,
si zieret unde crœnet
wip unde wiplichen namen;
8300 desn sol sich ir dekeiniu schamen. '

4) Friedrich Ranke: Tristan und Isold. 1925. S. 204.

5) Emil Nickel: Studien zum Liebesproblem bei Gottfried von Straßburg. 1927. S. 46.

6) Julius Schwietering: Die deutsche Dichtung des Mittelalters. Handbuch der Literaturwissenschaft, hrsg. v. Oskar Walzel. 1932. S. 184.

7) Magda Heimerle: Gottfried und Thoma. Ein Vergleich. 1942. S. 85.

8) Gottfied Weber: Gottfrieds von Strassburg Tristan und die Krise des hochmittelalterlichen Weltbildes um 1200. Band Ⅰ. 1953. S. 49f.

9) Hans Furstner: Der Beginn der Liebe bei Tristan und Isolde in Gottfrieds Epos. In: Neophilologus 41 (1957) . S. 27.

10) E. R. クルツィウス著『ヨーロッパ文学とラテン中世』みすず書房　232頁

11) Gottfried von Straßburg, Tristan. Nach dem Text von F. Ranke neu hrsg., ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von RÜDIGER KROHN. Band 3. 1981. S. 98.

12) Bodo Mergell: Tristan und Isolde. Ursprung und Entwicklung der Tristansage des Mittelalters. 1949. S. 127.

13) 4862–4895

mine vlehe und mine bete
die wil ich erste senden
mit herzen und mit henden

4865 hin wider Elicone
ze dem niunvalten trone,
von dem die brunnen diezent,
uz den die gabe vliezent
der worte unde der sinne.
4870 der wirt, die niun wirtinne,
Apolle und die Camenen,
der oren niun Sirenen,
die da ze hove der gaben pflegent,
ir genade teilent unde wegent,
4875 als sir der werlde gunnen,
die gebent ir sinne brunnen
so vollecliche manegem man,
daz si mir einen trahen da van
mit eren niemer mugen versagen.
4880 und mag ouch ich den da bejagen,
so behalte ich mine stat da wol,
da man si mit rede behalten sol.
der selbe trahen der eine
der ist ouch nie so cleine,
4885 ern müeze mir verrihten,
verrihtende beslihten
beidiu zungen unde sin,
an den ich sus entrihtet bin.
diu minen wort muoz er mir lan
4890 durch den vil lichten tegel gan
der camenischen sinne
und muoz mir diu dar inne
ze vremedem wunder eiten,
dem wunsche bereiten
4895 als golt von Arabe.

14) B. Mergell: ibid. S. 127f.

15) Lambertus Okken: Kommentar zum Tristan-Roman Gottfrieds von Strassburg. 1. Band. 1984. S. 275.

16) Ulrich Stökle: Die theologischen Ausdrücke und Wendungen im Tristan Gottfrieds von Strassburg. 1915. S. 38.

17) dito. S. 39.

18) dito. S. 42.

19) 8310–8314
8310 der wol gemuote Tristan
der greif do wider an sin leben.

im was ein ander leben gegeben:
er was ein niuborner man.
ez huop sich erste umbe in an;

20) B. Mergell: ibid. S. 125.

21) H. Furstner: ibid. S. 28.

22)『相愛大学研究論集』第5巻（通巻第36巻）、拙稿参照。

23) 8424–8432

'herre, so gebietet mir,
8425 so wil ich von dem hove varn:
ine mac mich vor in niht bewarn.
sol ich bi disem hazze wesen,
son kan ich niemer genesen.
e ich sus angestliche
8430 elliu künicriche
wolte haben ze miner hant,
ich wære e iemer ane lant.'

24) 8435……8442

8435 'neve, swie gerne ich stæte
und triuwe zuo dir hæte,
son gestatestu mirs niht.

. . . . . .

sag an, waz wiltu daz ich tuo?'

25) 8443–8445

'da besendet iuwern hoverat,
der iuch hier uf geleitet hat,
8445 und ervaret iegeliches muot:

26) 8453

und niwan durch Tristandes tot:

27) 8545–8557

8545 'herre' sprach aber Tristan
'sin misseredent niht hier an.
ez wære wol gevüege,
swa iuch der muot zuo trüege,
griffe ich ez beltlicher an
8550 und bereiter danne ein ander man;
und ist ouch reht, daz ich ez tuo.
herre, ich bin harte guot dar zuo:
ezn wirbet zware nieman baz.
gebietet et in allen daz,
8555 daz si selbe mit mir varn,

hin unde her mit mir bewarn
iuwer dinc und iuwer err.'

28) 8561–8577

'herre, zeware diz muoz wesen:
suln si sterben oder genesen,
daz muoz ouch mir mit in geschehen.
ich wil si selbe lazen sehen,
8565 belibet diz lant erben vri,
ob daz von minen schulden si.
heizet si sich bereiten!
ich wil den kiel leiten
und vüeren mit min selbes hant
8570 in daz sælige Irlant
hin wider ze Develine
gegen dem sunnenschine,
der manegem herzen vröude birt.
wer weiz, ob uns diu schœne wirt?
8575 herre, werde iu diu schœne Isot,
læge wir dan alle tot,
da wære lützel schaden an.'

29) E. Nickel: ibid. S. 46.

30) G. Weber: ibid. S. 51.

31) dito. S. 219.

32) H. Furstner: ibid. S. 29.

33) dito.

34) 8542–8543

nein ir von Curnewale,
ir muëzet selbe da hin:

35) 8638 sie wanden alle wesen tot:

36) 8660–8670

8660 'wisheit unde vuoge
derst harte vil an disem man.
ist daz uns got gelückes gan,
wir mugen vil wol mit ime genesen,
wolter dekeiner maze wesen
8665 an siner blinden vrecheit;
der ist ze vil an in geleit:
er ist ze vrech und ze gemuot,
ern ruochet hiute, waz er tuot;
ern gæbe niht ein halbez brot
8670 umb uns noch umb sin selbes tot,

参考文献

Gottfried von Straßburg: Tristan und Isolde. Aus dem Mittelhochdeutschen übertragen und erläutert von Günter Kramer. (Verlag der Nation 1970.)

Gottfried von Strassburg: Tristan. Translated entire for the first time. (Penguin Books 1972.)

Gottfried von Straßburg: Tristan. Hrsg. von Karl Marold. (Walter de Gruyter 1977.)

Gottfried von Straßburg: Tristan. Deutsche Klassiker des Mittelaters. Neue Folge Band 4. 1978.

Gottfried von Straßburg: Tristan. Übersetzt von Xenja von Ertzdorff, Doris Scholz und Carola Voelkel. (W. Fink Verlag 1979)

Gottfried von Stassburg: Tristan und Isold. Nach der Übertragung von Hermann Kurtz bearbeitet von Wolfgang Mohr. (Kümmerle Verlag 1979)

『トリスタンとイゾルデ』石川敬三訳　郁文堂　1987.